

『豊かな教育を考える会』シンポジウム

～ 教育ボランティアの今、そして私たち ～

1 日 時 2022年11月6日（日）

13:00～15:30

2 会 場 横浜国立大学

常盤台キャンパス

3 シンポジスト

◇ 鈴木 俊彰

横浜国立大学教育学部教授

◇ 富田 温子

横浜国立大学教育学部 3年

◇ 西 桃花

横浜国立大学教育学部 2年

◇ 藤馬 享(コーディネーター)

友松会副会長

4 内 容

「より優れた教員養成」のための一つの方法として、大学は学生が様々な体験学習・課外活動等を行って現場を知ることが大切に行っている。教育実習以外では校外での学習補助等の教育ボランティア活動があるが、多くは奉仕活動の面が強い。その中で、保土ヶ谷区が横浜国大教育学部に委託した「がやっこ探検隊」や、土曜日に小学校でレクリエーション大会を行っている「わくわくサタデー」は、学生自身が企画・運営する役割を担うボランティア活動で、それを体験することは将来の教師としての視野が広がると考えられる。今回、そこで活動している教育ボランティアの学生を交え、先輩の友松会員の経験をもとにどのような活動をしていけばよいか、また具体的な活動の価値づけなどを考え、改めて教育ボランティアの活動の意義を考えることができた。

次第

開会のことば(小池 弘子 副会長)

友松会会長あいさつ(小島 勝 氏)



今回のテーマは、学生が取り組む「ボランティア活動」です。先日、2人の学生が友松会事務局を訪れ、ボランティア活動に取り組む教育系学生の全国大会への支援をお願いされ

ました。学生の頃からボランティア活動を通じ子どもたちと触れ合い、教員となった時に力を発揮したいとの思いからです。盛大な大会になって欲しいと思います。今日も、その2人と同じ「いい眼」をした学生さんが16人以上集まりました。この後、学生さんのボランティア活動をご指導いただいている鈴木教授に基調となるお話しをいただきます。近い将来素敵な先生になるだろう学生さんたちと有意義な時間を過ごしていただければと思います。

教育学部長あいさつ(木村 昌彦 氏)

数年ぶりの対面での会、学部長になって初めてです。昨日広島のスぺシャルオリンピックの会場では横浜国大の卒業生が引率をしたり、ボランティアをしていたり、多くの卒業生がいました。私は教育学



部史上最も体重の重い学部長ですが、フットワークは軽いので、常識にとらわれないでいろいろなことができると思います。これからの教育は、どんどん自分たちで開拓していくもの。防御一辺倒に回ると、最後は追い詰められてしまいます。攻

めの防御、攻めて、攻めていくのがこれからの教育です。みなさん様々なボランティアをやっているのが、大変重要だと思います。教育は危機感をあおるより、未来を目指すものです。今日はOB、現役の先生、学生で未来をどう考えるか、未来を考えましょう。

(以後敬称略)

藤馬：この会は、2019年の横国デーが実施されてから3年ぶりに対面での開催となりました。昨年は対面できなかつたため、木村学部長と高橋前友松会会長との対談の様子をオンラインで皆様にお届けしました。その中で、横浜国立大学教育学部が、より質の高い優れた教員を輩出するために様々な努力をされていることが伝わって参りました。また、質の高い優れた教員になるためには、実際の子もたちと関わる活動を積み重ねることが大切だと考え、今回のテーマ「教育ボランティアの今、そして私たち」を設定しました。それでは、まず、鈴木教授より、現在の横浜国立大学教育学部の学生がどのようなボランティア活動を行っているのかを含め大学の施策の概要をお伺いしたいと思います。



鈴木：私からは、学外活動の現状について簡単にご説明させていただきます。大学の授業では、4年間を通して異なるタイプの実習を配置しております。1年次には教育実地研究、2年次にはスクールデー実践、さらに、3年次には小・中での教育実習を行っています。学外活動としては、学外学習ⅠからⅢまでを設定しています。学外学習Ⅰは、社会全般におけるボランティア活動です。選択で2単位取得できます。学外学習Ⅱでは、小・中・高で40時間以上の



教育ボランティア活動に参加します。これも選択で2単位取得できます。具体的には、地域との連携や特別支援教教育ボランティア、神奈川県スクールライフサポーターなどの活動を行い、レポートの提出や活動報告をしてもらいます。これらの活動については、オリエンテーションの折に情報提供をしております。最後に学外学習Ⅲですが、これは小学校を対象としたボランティア活動です。一つは、がやっこ探検隊、もう一つは、わくわくサタデーです。今日は、この2つの団体に来てもらっていますので、後ほど報告をしてもらいます。この活動は、1997年(平成9年)今から25年前、文部科学省が教員養成学部の学生に教育実習以外でも児童と直接触れ合えることのできる新しい事業として開設されました。がやっこ探検隊につきましては、保土ヶ谷区との連携で行っています。区から活動費として、631,000円の予算をいただき、参加する児童からも、年間で7,000円を徴収しています。わくわくサタデーは、土曜日に横浜市内の小学校に行つてボランティア活動を行っています。自治体が主催ではないので、活動費は未定です。今日は、これらの活動を行っている学生が16名参加していますので、グループ協議の際にはよろしくお願ひします。

藤馬：学生の教育ボランティアの状況がよく分かりました。それでは、教育ボランティアに参加している学生の方々からのお話を伺いたしたいと思います。

富田：教育学部3年の富田と申します。私は、現在社会科を専攻しています。まずがやっこ探検隊についての活動を紹介させていただきます。がやっこ探検隊は、現在48名の学生が保土ヶ谷区内の小中学生と活動しています。主な活動は、子どもたちとの顔合わせ会をはじめ、キャンプの運営、区民祭りへの出店、農業



体験などを予定しています。しかし、昨年は、コロナの影響で年2回しか活動ができませんでした。私がかやっこ探検隊に入った理由は、子どもたちと直接関わりたいということや子どもたちの笑顔を見たいということがあります。私は熊本県の出身で、中学3年生の時に大地震を経験しました。その際、ボランティアの皆さんが子どもたちの笑顔のために熱心に活動している姿に心を打たれたことも理由の一つです。かやっこ探検隊に入ってよかったことは、子どもたちとの関わり方を見つけることができたことです。子どもたちと安全で楽しい活動をつくるためには、子どもたちと直接関わるという経験がないとできないと思いました。また、子どもたちを楽しませると同じ目的をもった仲間と活動ができることもよい点です。様々な人と関わりコミュニケーションの仕方学ぶことができました。このように、かやっこ探検隊には、多くの学びを得られる場や本気になれる場がありました。これからも、子どもや学生たちと共に成長できる自分でありたいと思います。

西：教育学部美術専攻2年の西桃花と申します。



わくわくサタデーでは、副委員長を務めています。本日、お話ししたいことは3つあります。1つ目は、私がわくわくサタデーに入ろうとした理由です。2つ目は、わ

くわくサタデーの活動の様子。3つ目が、活動を通しての私の感想です。まず、私がわくわくサタデーに入ろうと思った理由は、私は横浜市の教員になろうという夢があるからです。しかし、私自身は人との関わりが得意ではないので、大学生の内にそれをどうにかしたいと思ったからです。そんな時、教育学部のオリエンテーションで学外学習Ⅲというのを知りました。これは、年2回横浜市内の小学校に行き、子どもたちとわくわくで

きる活動を行うというものでした。実際に小学校に行って子どもたちと交流できることに魅力を感じ、活動に参加することにしました。次に、活動の様子をお話します。昨年度は、コロナ対策のために10分程度の動画を撮影し小学校に送るという活動を行いました。今年度は、3年ぶりに対面式の講座ができるということで、開会式では小学生にわくわくサタデーに参加してもらうよう呼びかけを行いました。最後に、わくわくサタデーに参加しての感想を3つお話ししたいと思います。1つ目は、小学校における安全管理の大切さです。子どもたちの安全を確保するために、私たちは、「プランニングシート」を作成します。シートには、子どもたちと活動をする中での安全対策を具体的に記入します。また、保健会では、子どもがけがをしたときや体調不良を起こした際の対処法などを検討します。2つ目は、子どもとの接し方を学びました。実際に活動に参加してみると、私が想像していた以上に小学生には団結力があり、問題を解決する力もあることがわかりました。また、大学で学んだことを実践するよい機会にもなりました。3つ目は、チームワークの大切さです。例えば、タイムテーブル通りに活動が進まないときにどのようにすればよいかを考えることができました。物品の製作についても、限られた準備期間の中で、誰が何を担当するのかといった役割分担の重要性も学ぶことができました。

藤馬：お二人の話をお聞きになって、鈴木先生が感じたことがあれば、お話ししたいと思っています。

鈴木：私からは、後ほどまとめとしてお話をさせていただきますので、発表者の二人から、経験して学んだことや課題に思ったことなどを話してください。

富田：私は、横浜市立星川小学校と藤の木中学校の2校の特別支援学級でボランティアをさせていただいていますが、活動して学んだことは、子

ども理解のあり方です。大学の講義の中でも子ども理解が大事であるといわれてきましたが、いざ学校現場に行くと、言葉だけでは理解されないことがたくさんあることがわかりました。また、子どもたちとどう接していけばよいか、どういう言葉かけをすればよいかを現場に行くと初めて知りました。指示の出し方一つをとっても、「こうしたらいいんじゃない」といった指示の出し方では子どもたちは動けない。もっと考えて指示を出す必要があることを学びました。一番考えさせられたことは、学校現場にいったら、自分がどう立ちまわればよいかということでした。学校には週に1回しか行けませんが、自分ができるところを考えて行動するようになりました。はじめは、将来の教職のためにボランティアに参加しましたが、最近では、自分の心の中に子どもたちが育っている、住んでいるような感覚になります。それは、学校現場に行ったことによって生まれた感情です。自分自身の課題としては、指示の出し方もそうですが、個別指導の際に、子どもたちにどのようにやる気を起こさせるのか、その子の特性をどう捉えどう支えていけばよいかなど、学んでいくことが多くあると感じています。

西：私からは、アシスタントティーチャーについてお話をさせていただきます。私自身は、経験は浅いのですが、今日は2つお話をさせていただきます。1つ目は、去年の前期に行った横浜市立峯小学校で小学校1年生を担当したときの話です。算数の授業の中で、計算につまずいている児童がいました。問題は、「7個あるブロックから5個あるブロックを引くと残りはいくつになるか」というものでした。その子に話を聞いてみると、「黒板にブロックが12個あるのに、どうして7-5なのかが分からない」というのです。私は、「7-5」と自然に理解していたので、その子に納得のいく説明をすることが難しかったです。また、教える授業ではなく、考えさせる授業のあり方についても課題に

思いました。どこを考えさせればよいか、考えさせるためのアプローチの仕方はどうすればよいかについても課題に思いました。2つ目は、今年度の10月に参加させてもらった峯小学校の6年生の日光宿泊体験学習の引率ボランティアでの話です。2泊3日の宿泊学習でしたが、普段の活動とは違った難しさを感じました。最初に学んだことは、対処法が分からないときは、近くの先生に聞いて適切な対応をすることでした。また、アシスタントティーチャーとしての自分の立ち位置も重要であると思いました。自分は指導監督者であるということを常に忘れてはならないと思いました。今後の課題として、自分の苦手だと思われることを把握しそれらを克服する方法を身に付けたいと思います。また、自分の得意なことをどのように教育現場で生かすかも考えていく必要があると思いました。

鈴木：今、二人の学生から話を聞いて、私よりも説明が上手であると思いました。二人とも日頃から様々な体験を通して色々なことを身に付けていることがおわかりになったと思います。これは、行事を単にやるだけではなく、十分な準備や計画を立て活動を行っていることが理解できます。ただ、がやっこ探検隊もわくわくサタデーも自分たちがどれだけ楽しんで活動をしているかをアピールすることがあまりうまくないという指摘もあります。例えば、教員採用試験では、自分たちのこれまでの活動を説明することもあるかと思っています。そうしたときにも、自分をアピールすることが大切になります。今後は、アピールの仕方も研究してほしいと思いました。

藤馬：ここで、フロアにいらっしゃる現役の校長



先生に日頃ボランティアの学生と関わってお感じになっていることをお話させていただきたいと思いません。

國分：私は今、茅ヶ崎市の小学校で校長をしています。お話を聞いて思ったことは、教育ボランティアをすることが大学の単位として認められているのはよいことだと思いました。茅ヶ崎市は、どこかの大学と連携し何かをするということには行っていませんが、色々な大学から学生さんが学校に来てボランティア活動を行ってくれています。ただ、グループでの活動ではないので、学生は単独で活動することの難しさを感じているようです。そこで、私が日頃から学生に言っていることは、考えることの大切さを知ってほしいということです。例えば、子どもたちとどのように触れ合おうか、あるいは、現場の先生方はどういう気持ちで子どもたちと接しているのかということや想像したり、考えたりすることを大切にしてほしい。そうした経験を教育実習に生かしてほしいと言っています。今後も、よい経験をたくさんして、子どもたちと楽しい授業をつくってください。

藤馬：それでは、この後、グループでの話し合いを行いたいと思います。ぜひ、皆さんにとって有意義な時間になりますよう、ご協力をお願いします。



【グループ討議】

藤馬：それでは、グループで話題になったことなどを発表してください。

森：私は現在学生ボランティアとして学校にお邪魔していますが、僕たちに求められているものは何なのか、自分はどうすればよいのかといった気持ちで学校に行くことが多くありました。今日のグループ協議で、それらの課題を解決するヒントをいくつか教えていただくことができました。それは、進んで先生方とコミュニケーションをとることが大切だということです。自分が何をしたらよいか分からないときは、素直に先生方に聞いてみることに。僕自身が指示待ちであったり、分からないときは何もしなかったりしていたので、今後は分からないことはすぐに聞いて実行に移したいと思いました。



藤馬：もう少しお話を聞きたいと思います。

池田：皆さんのお話を聞いて一番感じたのは、横浜国大教育学部の卒業生には是非、教員になっていただきたいという思いをもちました。皆さんがしっかりとした考えをもって活動されていることが理解できました。



海老名：グループのコーディネーターをしました。私たちのグループには3年生の学生さんが参加してくれて、そのほとんどが運営にあたっているということでした。中には、児童の安全管理や保護者との対応を含めたボランティア活動全体のマネジメントをしている方もいらっしゃいました。様々な体験や立場を通して、自分の経験値を上げているのだと思いました。



藤馬：最後に笹原校長先生にお話させていただきたいと思います。

笹原：私は昨年度までは小学校、今年度は中学



校で校長をしております。が
やっこ探検隊の何人かの方
とはこれまでも関わってき
ましたが、本当に皆さんが力
をつけていることがよくわ
かります。学校現場でボラン

ティアの皆さんにどのようなことを求めているか
といえ、今の段階では子どもたちを優しく見守
ってくれる大人であればありがたいということ
です。けれど、皆さんが教員になったら、ボラン
ティア活動や教育実習では経験できないこともあ
ります。それは、まず、保護者対応です。それから、
成績をつけること。あとは、大きなトラブルがあ
った場合の児童・生徒指導です。こうしたことは、ボ
ランティア活動中には経験できないこと、むしろ
学校としてはボランティアの人には任せられな
いことになっています。ですから、ボランティアを
続けながら、そういうことが学校現場にはあるこ
とを知ってほしいのです。また、そのときの先生
方の対応の仕方を見てほしいと思います。私が
最近読んだ本の中で、「教員という仕事は感情労
働である」という一節がありました。まさに、学校
現場は、頭脳も体力も使いますが、子どもの感情
や保護者の感情を読んで、気持ちを伝えわかっ
てもらわなければならないことが多くあります。
また、教育現場に入れば、教員同士の間関係も
難しいかも知れません。ボランティア活動の仲間
のように、モチベーションの高い人ばかりが集ま
るとは限りません。そうした中でも自分はどうし
ていきたいかをはっきりと固めていると、教員に
なったときには即戦力になると思います。

藤馬：最後に、今日発表をしてくださった、富田
さん、西さん、鈴木先生からひとつずつお話し
いただきたいと思います。

富田：グループの中で様々な先輩方とお話をし
て自分たちが学生であること、若いということ

がどれだけ強みであるかということが理解でき
ました。これからも、自分には色々な可能性や伸
びしろがあるということを生かし頑張っていこう
と思いました。

西：私自身はボランティア活動に対して不安や
苦手意識がありました。しかし、本日のグループ
協議を通して、不安や苦手なことがあっても、今
のうちに様々な経験をしてメンタルを強くしてい
こうという気持ちになりました。

鈴木：本日は先生方どうもありがとうございます。
また、学生の皆さんも先生方から様々なご
意見を伺い、今後のボランティア活動に生かして
もらえるのではないかと感じました。私がこの大
学に赴任したのは2009年でした。その後、友松会
の先生方と直接関わりをもち、友松会の先生方
の母校や学生に対する熱い想いを感じておりま
す。友松会は、横浜国大教育学部の同窓会という
組織です。学生の皆さんは今後も活動していく中
で悩みや困りがあつたら、気軽に先輩方に相談し
てみてください。



藤馬：本日は、協議を通して、横浜国大の卒業生
がよりよい教員になるために何をすればよいか、
どのような活動をしていけばよいかなどを皆さん
と共に考えることができたのではないかと思います。
ご協力ありがとうございました。

閉会の言葉(萩田 誠 副会長)